

平成28年8月31日
福岡県ハンドボール協会
川端祐貴・今泉暢禎

第71回九州ブロック国体レフェリーレポート

日時 平成28年8月20日(金)～22日(火)

会場 宮崎県 綾てるはドーム 佐土原体育館 天ヶ城体育館

8月20日(金)

審判会議

① ルールテスト

会議に先立ち、競技規則テスト(25問)が行われた。今年度からは、九州ブロックでは、各県帯同の大会(九州中学生、九州ブロック国体、日本選手権予選、九州高校選抜)においては必ず実施していく方向だということだ。20分程度で解答し、事務局に提出した。解答は配られずに各自の資料を基に答え合わせを行った。

② 奥山審判長から

- ・平成28年度の審判員の目標にある、正しいステップの評価と判定、ハードプレーとラフプレーの見極めをしっかりとやる。
- ・この大会には成年の部と少年の部に分かれるので、新ルールにある選手が負傷した際の対処は注意して行う。
- ・新ルールによって、7人攻撃をするチームが多く出てくる可能性がある。攻守が切り替わった直後の状況をしつかりと見極めて判定しなければならない。
- ・パシブの予告からのカウントの仕方については、全国研修会などで配布されてきた資料をしっかりと確認して行う。パスの回数を聞かれた場合は答えてよい。
- ・7月に追加で出された通達にある、フェースガードを身に着けた選手がいた際は、表に示された手順で対処する。
- ・レフェリーとしての20の約束を再読し、徹底する。

8月21日(土)

会場：綾てるはドーム

担当試合 成年男子1回戦 沖縄県ー熊本県 36(15-5,21-13) 18

日本リーグチームの琉球コラソンを中心としたメンバーの沖縄県と、学生を中心としたチーム構成の熊本県との試合は、立ち上がりから沖縄県のペースで進んだ。ハードなプレーが随所に見られる中で両チームともにラフなプレーはほとんどなく、クリーンなゲームとなった。体格の面で勝る沖縄のハードなプレーをどこまで許すかという点では、熊本としてはもう少し低い基準でファールを取ってほしいと感じていたようにも感じる。チーム全体としての体格差のあるゲームの基準作りの難しさを感じるゲームであった。

反省会(奥山審判長から)

- ・段階罰なのか直接の2min.なのかという基準をペアとしてしっかりと定めておかなければならない。今日の反省でも数ペアから反省として出ていた。顔・首、空中、高速などキーワードを整理していて、それに該当するプレーだと判断すれば、躊躇なく2min.を出せる準備を試合開始直後から行っておかなければならない。
- ・明日の割り当ては7時の朝食の前のミーティングで発表するが、今日と同じように2試合担当するペアもいるので、体調管理をしっかりと行う。

8月22日(日)

会場：綾てるはドーム

担当試合 成年男子準決勝 大分県—沖縄県 29 (12-11, 17-13) 24

岩手国体の出場権をかけた一戦は、琉球コラソン中心の沖縄県と、ほぼ全員が雄城台高校出身の学生メンバーの大分県であった。大分県はクイックスタートを中心に早い展開でチャンスを見出そうというチームであった。昨日の試合でもクイックスタートの際に再度プレーヤーやボールに近い位置で飛び出す選手が笛よりも先にラインを超える場面があったために、序盤に線引きをしっかりすることは課題の一つであった。一方、沖縄はゆったりとしたリズムから要所にスピードとパワーにて得点を重ねるといった展開であった。前半は、それぞれの長所を出しながら均衡したゲームとなり、大分県が1点リードで折り返した。後半に入り、大分県が少しリードを広げ、沖縄県に焦りがでてフラストレーションが高くなる場面もあった。一つ判定として難しかったのは、大分県のクイックスタートの際にサイドプレーヤーが早く出たために吹き戻したが、その選手にパスが入り、笛の音の後にその選手はゴールにボールを投げた。その行為に対して沖縄の選手から「投げた」とアピールが入ったが、ターンオーバー後ではないので口頭で注意をするのみと対処した。沖縄県はYC1枚、大分県はYC2枚と退場が1回とクリーンなゲームの中、最後まで要所にスピードを活かしたプレーから点数を取り続けた大分県がリードを守り切り金星を取った試合であった。

担当試合 成年男子決勝 佐賀県—大分県 35 (15-11, 20-9) 20

決勝戦は日本リーグチームのトヨタ紡織九州の佐賀県と沖縄県を破って勢いに乗る大分県の試合となった。立ち上がりから、スピーディーな展開となった。大分県は学生中心に走り勝とうと狙うが、それに対して佐賀県はベンチからも「走り勝て」と指示が入るように、スピードでも大分県を圧倒した。序盤から、最大の持ち味のスピードでも劣勢となり、大分県は厳しい試合展開となった。後半に入ってから、スピード、体力、パワー、テクニックとすべてにおいて勝り、相手に隙を与えなかった佐賀県が圧勝したゲームとなった。一つ判定として難しかったのが、大分県がサイドシュートに飛び込んだ選手が中央にパスをしてスカイプレーを狙った。その際に、佐賀県の選手が明らかに6 mライン内に入り、そのパスをカットした。パスが通れば明らかな得点チャンスであったために7 mTを即座に判定したが、何故か佐賀県ベンチからは理由を質問され端的に説明をする場面があった。また、この試合を通して数回、佐賀県が7人攻撃をする場面があったが、率直な印象はやりにくいということであった。攻守が入れ替わればすぐに明らかな得点チャンスになるために、常にその状況を把握していなければならないということや、CRとしてどの位置に立っておくべきかなど、これから研究してトレーニングを重ねていかなければならないと感じた。

大会を終えて

第36回九州ブロック国体に参加をさせていただき大変得るものが多い大会となりました。奥山審判長を中心とした審判団の方々や、地元宮崎県協会の方々に感謝申し上げます。この大会中では、特に競技規則の変更点に注意して吹笛をして、他県のペアの方々の試合を見ました。選手の負傷への対応としては、成年の試合のみですが、問題になるような場面はなかったように思います。パッシングプレーに関しては、予告合図を上げるタイミングに気を付けることを意識し、チームに訊ねられたら回数を答えられる準備をしておくように心掛けました。

私たちペアは10月5日から岩手県花巻市で行われる第71回国民体育大会希望郷いわて国体にノミネートをしていただいています。今大会で出場が決定した九州の代表チームと共に、私達も九州の代表として九州のハンドボールのさらなる発展のために精一杯のレフェリングをしようと思います。